新蔵生田文庫について

関　屋　俊　彦

旧生田文庫

関西大学総合図書館には生田文庫がある。吹田の大阪麥酒会社（大日本ビール、現在のアサヒビール）を創立した生田秀氏（明治39年逝去）とその子息耕一氏（昭和８年逝去）によって収集されたもので、昭和23年に『万葉集』を中心とする約1,600冊が遺族から寄贈された。既に『関西大学所蔵生田文庫・頴原文庫目録』（昭和38年９月１日）として公にされている。その後、吉永登氏は「生田文庫」と題して関西大学図書館報『籍苑』第20号（昭和60年４月28日）に梗概を寄せられているが、解説は御専門上『万葉集』を主としたものであった。私は関大赴任後、その中で特に能楽史料に着目し「生田耕一と能楽伝書－関西大学図書館蔵本について－」と題して『かんのう』（平成２年２月号・大阪能楽観賞会）で報告し、拙著『狂言史の基礎的研究』（1994年＝平成６年３月31日・和泉書院）に再録した。すなわち、耕一氏は『万葉集』研究の一方で山崎楽堂と『鼓筒之鑑定』（大正６年・わんや）を刊行するなど、能楽の小鼓の研究にも力を注いでいた。そして『四座役者目録』や『催華餘薫』（浅野栄足『優伎録』のこと）などの丁寧な写しほか能楽伝書が多いことについて報告した。いちおう生田家にも問い合わせの手紙を出したが、御返事はもらえなかったし、多分もうお宅にはなにもないのだろうと思い込んでいた。

なんでも鑑定団

しかるに平成14年９月３日、何気なくテレビの「なんでも鑑定団」を見ていて仰天した。耕一氏の孫にあたられる秀昭氏が鼓筒（鼓の胴体の部分）80余丁を鑑定に出されたのである。すぐに手紙を差し上げ、16日に阪急吹田駅から徒歩10分の御自宅で初めてお会いすることができた。12年前、私からの手紙は受け取ったが、当時はさして興味にとめられなかったこと、鼓筒以外にも大量の蔵書があり、整理に困っていること、旧蔵書が関大に入ったいきさつは、当時、図書館になにもなかったことを憂えられた金子又兵衛氏が名家同士のよしみで気楽に声をかけたのが御縁であったこと、元の実家は茶室兼能舞台のある家であったこと、蔵書印の「筒哉」の印は竹製で今も保管されていることなどなど実に興味深い話が伺えた。そして、私としては残った蔵書については是非関大の御縁で入れてもらえないかと胸の内を打ち明けたのであった。

鼓筒については、テレビに出演された影響が大きく、既に業者から購入についての問い合わせがきているとのことであった。これは小鼓方の大倉源次郎氏（以前、関大の非常勤講師）などとも話し合ったことであるが、せっかくの文化財をばらばらにして欲しくないから、しかるべき機関に保管されたい、それも小鼓は能面と同じく舞台で使用してこそ価値があるのでいわゆる博物館などで死蔵されることのないようくれぐれもお願いして御納得いただいたことである。いずれにしても鼓筒の方は大金なので、関大で手に入れることは最初からあきらめていた。なお、早稲田大学が中心となって、鼓筒の寸法を計測するなどの作業は進められ、冊子にされるとまでは聞いているが、残念ながらまだ落ち着く先は決まっていない。蔵書については、その後、私も研究会で紹介したこともあり、早稲田大学や立命館大学などの知るところとなり狙われ始めたのである。

秀　氏

ここで生田文庫の根幹となった生田秀氏その人のことについて述べなければなるまい。生田家本籍は佐渡島。秀氏は、明治初頭当時の内務省からドイツに派遣され、帰国後、大阪麥酒会社を創立したひとりとなった。『明治過去帳』にも記されるほどの人で、社史である『Asahi100』（平成２年・アサヒビ

ール株式会社）には「日本近代ビールの父・生田秀」として頁を割いている。すなわち吹田の本社正門前の迎賓館のある庭の「先人の小道」には秀氏の胸像も建立されている。別の日にアサヒビール資料室を訪れ、高橋典夫氏から秀氏の同社での蔵書はビール関係だけであるが、本店も含めて『ミュンヘン醸造学校報告』など10点であるとの御教示を得ている。なお、ご子息耕一氏はアサヒビールにお勤めではなかったこともわかった。のちにも触れるが、残された写本から秀氏は観世流の大西閑雪の社中のひとりであり、大倉流の小鼓や金春流の太鼓を習っていることがわかった。御自宅には茶室兼能舞台もあったと言われることをも含めて、能楽への興味は耕一氏以前秀氏からであったのである。

家に歴史があるように生田家の蔵品・蔵書も度々の危機に襲われている。大正７年６月に発行された生田家の「入札目録」があるように、結果的にはさして売れなかったようだが、いったんは鼓も含めて流出の可能性があったようだ。そして、大正12年の関東大震災の時は小田原に住まわれていて、『鼓筒之鑑定』を埋めた「鼓塚」の所在もわからないままであるという。たゞ昭和９年５月当時の蔵書の全貌は、耕蔵氏の代になって『生田家蔵書　鼓琴窟図書目録』が原稿用紙363枚にわたって作成されている。この目録も図書館所蔵となった。

搬入ならびに整理

残っている蔵書については、私的なものや秀昭氏が次第に興味を持たれた鼓筒関連のものは除き、関西大学図書館に寄贈されることとなった。生田家の心を動かしたのは関大には既に生田文庫があり、それらは肥田皓三氏以来、和本を丁寧に帙で保存されている方針をご覧になって安心されたことも要因のひとつであろう。そして、ここで名前をあげるのは差し控えるものの新たに蔵書に加えられるに至ったのは、関西大学の関係各位の御協力の賜物で深く感謝する次第である。

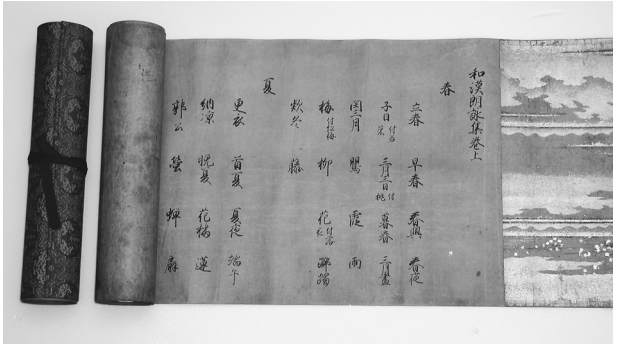
新蔵書は図書館の作業室に運び込み、大学院学生にも手伝ってもらい目下整理中である。ダンボール箱や紙袋大小取り混ぜて10箱以上あった。半世紀ぶりに開かれた歴史的資料である。とりあえず厚く積もった埃などを拭うのが大変であった。虫も這い出してきた。新蔵書は能楽関係のもの219点を主として、そのほか芸能に関わるもの（舞楽・琴・茶道）15点、一般国書39点、漢籍・漢文関係７点、洋書２点、尺読（手紙）などがある。そして、思いがけない素晴らしい資料が含まれていることも判明しつつある。仮目録は既に作成してあるのだが、『鴻山文庫蔵能楽資料解題』（法政大学能楽研究所）や『早稲田大学演劇博物館所蔵　貴重書　能　狂言篇』といった解題目録作成を目指している。単なる目録ではなく解題目録にこだわるのは、時間はかかっても近代黎明期の巨人の仕事を辿ることが大事だと思われるからである。仮解題目録を目次で示せば、Ⅰ能楽関係写本の部、Ⅱ能楽関係版本の部、Ⅲ明治以降能楽関係の部、Ⅳ一般芸能関係の部、Ⅴ一般国書の部、Ⅵ漢籍・漢文の部、Ⅶ史料の部、Ⅷ洋書の部とした。点数からいえばどう分類しても能楽関係のものが多い。Ⅰ～Ⅳは更に謡本の部・注釈の部・伝書の部・付（つけ）の部・史料の部・雑書の部・狂言の部と分類した。これは早大演博本にならったが、ⅡⅢは単に出版年順でもよいかとも思っている。Ⅳは更に舞楽の部・茶道の部に、Ⅶは目録の部・書簡の部・短冊の部・そのほかの部に細分した。実態に合わせた訳である。

順次整理が進むにつれ、研究会で報告を行なった。すなわち、平成14年11月23日に六麓会で「生田文庫のその後」と題して能楽関係のものを、翌15年の藝能史研究会４月例会では広げて芸能に関わるものに限り簡単な書誌を添えて紹介した。

『和漢朗詠集』と『明末扇面書画』

新蔵書で特筆すべきは『和漢朗詠集』２巻である。極書に見られるよう藤原為家（建治元〈1275〉年78歳没）等錚錚たる人物の筆写の手で張り継がれたものであり、全体的には鎌倉時代のものと言って差し支えないものである。以下、簡単な書誌をとる。／は行替え。

『和漢朗詠集』２巻。鎌倉時代写。上巻は縦10ミリ、長さ18914ミリ。下巻は縦310ミリ、長さ19670ミリ。蓋

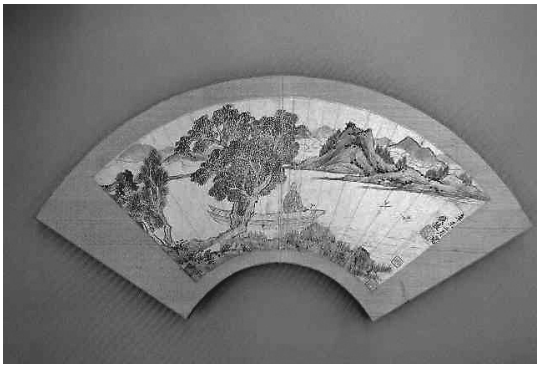


『和漢朗詠集』２巻（鎌倉時代写・右は上巻の冒頭）

付箱入。箱は縦345ミリ、横161ミリ、高さ99ミリ。箱書表貼紙題「朗詠（剥離）」。箱下横貼付紙「和漢朗詠集　筆者為家卿　行能卿　通村公　實陰公　二巻（朱角印）」。極書２枚あり、①和漢朗詠集貳巻筆者極「朗詠集上下　為家卿　行能卿／書継／通村公　実陰公／いつれも正筆／面白モノ／古筆了仲（花押）和漢朗詠集巻上／墨付三十六枚継／二条家為家卿／九月九日付菊／三十五枚／中院通村公／和漢朗詠集巻上／春　壱枚／倭漢朗詠集巻下／墨付三十四枚継／世尊寺行能卿／倭漢朗詠集巻下／会斯遥　十四枚／中院通村公／ほの〳〵と／十九枚／武者小路実陰公／我こひは／壱枚／右前書筆蹟関之翁／鑑定之通各真蹟也／明治二十年十一月　佐藤栄中（印）（花押）」。②「為家卿　後鳥羽帝建久九年生西行此年死／後宇多帝建治元年五月一日卒七十八／行能卿　高倉帝治承三年生　重盛死／後深草帝建長七年二月十一日卒七十七／通村公／後陽成帝天正十五年生／明正帝承応二年二月廿九日六十七／実陰公　後四条帝寛文元年生／桜町帝元文三年卒七十八」。

次に目を引くのは『明末扇面書画帖』である。題簽には「明人摺扇書畫帖」として「摺」とあるものの明らかに筆写された書画であり、美術鑑定に詳しい山岡泰造氏によると明末成立の珍しい貴重なものであるとの見立てである。以下に書誌を記す。

『明末扇面書画帖』扇面折帖一帖。題簽に「明人摺扇書畫帖　愉翁題」とする。扇型箱入。見開きの高さ224ミリ、幅603ミリ。書８面、山水画５面、笹雀画１面、識語１面の計15面。裏に「道林寺」と記す。箱書表に「明人摺扇書畫一帖」と墨書。下方に「額第三号　明人摺扇画帖」と貼付墨書。ほかにも貼付紙あるも剥落。包布あり。「摺」とあるも筆写されたもので明末の成立。

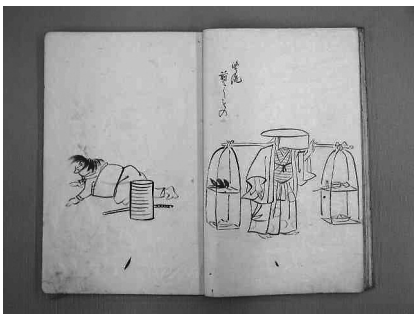


能楽関係

能楽関係のものは近世中期成立以降の冊子が圧倒的に多いが、写本に限れば、その性格上全て新史料ということになる。書名のないものも能楽研究の昨今の著しい進歩からすれば、もはや単に「能秘伝書」と題する訳にはいかない。細かい分類と共に仮題をつけなければならない訳だが、これに苦心する。以下、いちいち断らないが仮題のものも含めて主なものを紹介したい。

まず謡本53点中、ある程度まとまった揃本（完本という意味ではない）としては観世流を主としている。そして、現行曲はたとえば近世初期の写しと思われる『綴葉装五番綴謡本』20冊や明治版『袖珍観世流謡本』など基本的なものを求められたのは当然として、綴葉装の紺地白草花模様の覆表紙で金横雲の入る題簽を持つ『三十五冊十番綴番謡本』もそうだが、あとはなるべく番外曲を求めようとしている節が見受けられる。『安藤本八十七冊揃一番綴番外謡本』や『五十七冊揃番外謡本』などがそうである。伝書30点には珍しいものがありそうだ。中には『叢伝抄』と同系統の『五音之能心持事』などがあるので一概に言えないが、『サル楽集』『習事之書』『袖下』などと言った、よく読んでみないと外題からではわからないものがあるし、『能狂言秘伝書』のように水損のため開けにくいものもある。付に分類したが『春宮風鼓』は鳥の子綴葉装で転写本ではあるが中奥書には明応・永正といった古い年号も記されている。『関寺伝授』は小品の巻子ながら藤宮七兵衛が享保７年に秘曲伝授を受けた証である。それぞれ即断しかねる不明は無念だが、今後研究するに伴って思いもかけない価値が出てくるものもあるに違いない。

謡以外のことを書き付けた節付・型付・装束付などを総称して付というが、この分類が大変面倒で、しかも101点と最も数が多い。これはどうやら耕一氏が鼓に詳しかったのは元より、父秀氏の能楽への並々ならぬ思いに負うところが多いようである。明治37年の「大西閑雪翁社中名簿」に「東区今橋３丁目　生田秀」とあり、秀氏が当時大阪市内にお住まいで、観世流シテ方の大西閑雪に謡を習っていたことがわかる。旧蔵書『催華餘薫』の名前の由来を閑雪に聞いているのもこれでよく納得できる。謡だけでなく、明治35年写の『金春流太鼓』や明治36年写の『大倉流小鼓一調手付』の書き込みから金春流太鼓や大倉流の小鼓を習っていたこともわかる。さらに太鼓伝書の『ミちのおく』は嘉永４年の写本であるが、「秀按」と自分の考えを書き込んでもいる。謡本に鼓の手付けの書き込みがしばしば見受けられ



『狂言尽図絵』（玉手菊州筆）

るのを含め、付の類は耕一氏共々まさに舞台で使用するための実用書として使用されたのであろう。自宅に茶室兼能舞台もあったと言われることをも含めて、当時の第一線の経済人が一方でいかに文化を大切にしたか、その豊かな感性を垣間見られるというものである。

狂言の６点は全てが新出写本で、大蔵流の台本・間狂言があるが、玉手菊州筆『狂言尽図絵』は古雅な画風である。

版本41点で最も古いのは『貞享三年林和泉掾番外謡版本』である。『明和改正謡本』も不揃いだが内９冊、外10冊とある。『今泉謡之抄』などもある。明治以降のものは56点ある。

こうしたものを、どうやって入手したかであるが、『玄笛流笛伝書』に「松雲堂鹿田静七」の挿紙もある。懇意な古書店のひとつでもあったのであろう。なお、宮本圭造氏から紀州藩関係のものが多いのではないかとの御指摘もある。その視点も今後明らかにする上で大切であろう。

能楽以外

能楽以外のいわゆる芸能関係では舞楽・雅楽に属するものが11点と割と多い。そのほか琴が３点、多いのではと思われた茶道は安政版『茶則』１冊のみである。一般国書は先に触れた『和漢朗詠集』がず抜けて古いが、それ以外では江戸時代のもの13点、近代のもの25点である。版本では延宝７年『増補難波集』が最も古い。古銭にも興味を抱いておられたようで３点ある。なお、秀氏がドイツを訪れた際のビールや軍事関係の本の翻訳ならびに耕一氏の方には『万葉集』の研究にも没頭され著書もあるが、それらの元原稿は今後共生田家が所蔵される。漢籍・漢文の部としたが、中国で書写ないし刊行されたものは『明末扇面書画帖』だけのようなので、これ以外は国書に入れるべきものかとも思っている。全頁漢文のものや中国の地図もあるため、便宜上この分類とした。

書簡類

蔵書目録を除いた冊子形態でないものは史料の部に入れた。細かいものでは切手・請求書がある。短冊や色紙仕立てのものもあるが、これは耕一氏が「三水会」に所属し、大正13年に『寄生木』（非売品）を出すほどの歌人であったことにもよる。

そのほか、興味をそそられるものは書簡類である。図書館に運び込まれた時は衣装箱に納められていたが、大抵が丁寧に裏打ちされ８通は最も大事なものとして巻子仕立てにしてある。たとえば吉沢義則氏の手紙は京大三筆といわれただけあって、まことに流麗な筆運びである。耕一氏は素人ながら澤瀉久孝氏の薫陶を受け万葉集の研究に打ち込み『万葉釈文索引』『万葉集難語難訓攷』を出版しているが、それを各方面に寄贈している。それに対する礼状が多い。澤瀉氏以外の万葉研究者では石井庄司・鴻巣盛廣・佐伯梅友・武田祐吉・正宗敦夫・森本治吉・J. L. PIERSON Jr. の名が、それ以外では上野精一（朝日新聞社主）・春日政治（国語学）・佐々木信綱（国文学）・高浜清（虚子）・羽倉信真（伏見稲荷宮司）・松岡静男（柳田国男の弟）の名が見られる。一通気になるのがある。学習院大学教授の荒木寅三郎からの昭和初年の礼状に「御秘蔵之能道具能書ヲ安田氏へ御譲リ被相成ル由」とあるものである。大震災後、安田氏へ能楽関係の道具・本を耕一氏が譲ったというのである。実態を明らかにしたい。

おわりに

戦後、多くの私立大学がそうであったように、貧弱な図書館の蔵書収集には関係者による相当の腐心があった。関西大学図書館と大学のある吹田市の名家生田家との関わりもその例に漏れない。図書館に何もなかった時代、金子又兵衛先生の仲介で生田家の本が入った。私事ながら学生時代、当時まだ円型図書館の時、生田文庫の基本図書をそうとは知らずに利用させてもらっていたことになる。こうして残りの本も関係者の応援を得て図書館に入った。すばらしい史料を得た上は、その全貌を明らかにするのが今後の私たちの役目である。そして、関西大学とアサヒビールを含めた生田家両者の絆をより深めて将来へのバトンタッチをしてもらいたいのが切なる願いである。

（せきや　としひこ　文学部教授）